「Ｓｈａｌｌ　ｗｅ　ｌｉｖｅ？」

作・演出　長野恵美

草川（くさかわ）　舞（まい）（２３）カンボ…　終末ダンサー・可愛い担当。
高橋（たかはし）　愛結子（あゆこ）（３２）Ａｏｉ（あおい）…　終末ダンサー・お母さん担当。

暗闇の中、舞と愛結子が歩いている。舞の手には懐中電灯。
２人とも、ボロボロのコートを身に纏っている。

舞　「ひゃっ！？何か踏んだし……」
愛結子「大丈夫？」
舞　「大丈夫です」
愛結子「気を付けてね。ここ、６階」
舞　「大丈夫ですって！」

舞の手が、愛結子に当たる。

愛結子「痛っ」
舞　「えっ？」
愛結子「あ。ごめん。大丈夫大丈夫」
舞　「……（小声で）大袈裟だし」
愛結子「え？」
舞　「私、そんなに強く叩いてないし……」
愛結子「……舞ちゃん、あのね」
舞　「あ」
愛結子「何？」
舞　「高橋さん、ここ……！！」

間。舞と愛結子、歓声を上げる。明転。
【２０１９年３月・廃マンション・６０６号室】
舞、喜びの舞を舞いながら、歓声を上げながら登場。

愛結子、少し遅れて登場。２人の手には食料の入った袋が。

舞　「凄い凄い凄い！ここのｆｌｏｏｒ超凄い！」
愛結子「本当だね。まさか、こんなに缶詰が残ってるだなんて」
舞　「缶詰だけじゃないですよ！ほら、パックご飯もいっぱい！
（袋から中身を取り出して）えっと、サトウでしょ？サトウでしょ？サトウでしょ？鯖でしょ？サトウでしょ？鯖でしょ？鯖でしょ？鯖どんだけ鯖が好きなんだよ！？」
愛結子「鯖は、栄養豊富だからね」
舞　「まあ別に良いですけど。高橋さんのは？」
愛結子「えっとね（袋から中身を取り出して）いろはすでしょ？いろはすでしょ？いろは」

舞、愛結子からいろはすを１本奪い、それを一気飲みする。

愛結子「ちょっと！」
舞　「……」
愛結子「……舞ちゃん？」
舞　「……美味しい」
愛結子「……」
舞　「美味しい……杉山さん……逢いたいよう……」

舞、しくしくと泣き始める。ストップモーション。
※以降、Ｎ＝ナレーション。録音音声。

愛結Ｎ「私、高橋愛結子と、彼女、草川舞ちゃんは、かつて、同じダンススクールに通う、ライバル同士でした」
舞Ｎ　「え？ダンスのライバル同士かって？まあ、それもありますけど、一番は……」

曲。舞と愛結子、コートを脱ぎ捨て、ポーズを決める。
【２０１８年１２月・ＴＡＭＡダンススタジオ】
舞と愛結子、踊り出す。
舞、やがて、愛結子を押し退けて前に出る。

舞　「杉山さーーーーーーんっ！！」

愛結子「痛っ！？」
舞　「私を！舞の事を見てください！」
愛結子「す、杉山さん、私も」
舞　「舞の舞を見てください！」
愛結子「私を」
舞　「見てください！舞の舞を！舞の舞を！舞の舞を！」
愛結子「私の事」
舞・愛「見てください！！」

曲、止まる。舞と愛結子、ストップモーション。

舞愛N「私達は、同じ男を好きになった、恋のライバル同士だったのです」

舞と愛結子、杉山に向かって一礼する（マイム）。

舞・愛「ありがとうございましたー！」
舞　「（杉山を見送る）杉山さん、バイバーイ！……きゃーっ！！
（杉山の真似）やれやれだぜ……超カッコいい～」
愛結子「（溜息）」
舞　「……あの」
愛結子「はい？」
舞　「さっき、ぶつかった時」
愛結子「あ、大丈夫だよ。ちょっとビックリしただけだから」
舞　「わざとですよね？」
愛結子「え？」
舞　「（愛結子の真似）痛っ！？……って。本当は全然痛くなかったんですよね？なのに杉山さんの前だからって、あんな、か弱い女アピール」
愛結子「そんなつもりじゃ」
舞　「まあ、別に良いんですけどね。高橋さん、可哀想だし」
愛結子「可哀想……？」
舞　「高橋さん、私と違って、顔、全然可愛くないですもんねー？
これ位のハンデがなくっちゃ、高橋さん、もーっと惨めになっちゃいますぅー」
愛結子「（苦笑い）ははは……」

舞　「……キモッ」

舞、出て行こうとする。

愛結子「舞ちゃん待って」
舞　「気安く呼ばないでください」
愛結子「ごめんなさい。あのね、話が」
舞Ｎ　「と、その時でした」

爆発音。

舞　「え、何？この音（窓の外を見る）……え？」
愛結子「何あれ……流星群……！？」
舞　「え、やばいやばいやばいやばいやばい」
愛結子「こっち、くる……！？」

衝突音。街中が破壊される音。舞と愛結子、叫び、逃げ惑う。

愛結Ｎ「私達が見たもの。それは、天空から降り注ぐ、数えきれない程の隕石群でした」
舞Ｎ　「たくさんの隕石が街中を破壊する中を、私達は、必死に逃げました」
愛結Ｎ「逃げまくりました」
舞Ｎ　「逃げに逃げまくりました」
愛結Ｎ「たくさんの人達が死んでいく中、私達は、どうにかこうにか生き延びる事ができました」
舞Ｎ　「え？どうやって生き延びたのかって？そんなの、決まってるじゃないですか。そう、私達は」
舞愛Ｎ「ダンスをやっていたから！！」

ステップを踏む様にして、隕石を避けまくる２人。
暗転。風の音。

愛結Ｎ「あれから、３ヵ月の月日が経過しました」
舞Ｎ　「なんやかんやで、地球上の、殆どの生物達が死に絶え」
愛結Ｎ「私達は、ふたりぼっちで、この荒れ果てた大地を彷徨う事と

なったのです。そう。この、相性最悪の、2人、ぼっちで……」

風の音、静かになる。明転。

【2019年3月・廃マンション・606号室】

舞、いろはすを飲みながら泣いている。

愛結子「……舞ちゃん……今日、ここに、泊まろっか？」

舞　「……はぁ？」

愛結子「もう、暗いし。ここ、見た目よりは頑丈そうだし」

舞　「そんなの、分からないじゃないですか……」

愛結子「でも」

舞　「あー、むかつく！」

舞、退場しようとする。

愛結子「何処に行くの？」

舞　「トイレ！」

舞、退場。間。愛結子、吐き気を催し、しゃがみ込む。

愛結子「……杉山さん……」

愛結子、しばらく蹲るが、水を流す音を聞いて立ち上がる。

舞、登場。

愛結子「お帰りなさい……凄いねこのマンション！まだ水、流れるんだね」

舞　「……」

舞、椅子に座り、ドヤ顔でポーズを決める。間。

舞　「座れば？」

愛結子「はい？」

舞　「座れば！」

愛結子、舞からかなり離れた所に座る。間。

舞　「喧嘩売ってるんですか？」
愛結子「ごめんなさい……」
舞　「はあ？」
愛結子「ごめんなさい……」
舞　「……あーあ。煙草吸いたい」
愛結子「え、吸ってたの？」
舞　「吸ってませんけど？」
愛結子「ええ……」
舞　「煙草でも吸わなくっちゃ、やってらんない気分って事です」
愛結子「そう。なら良かった」
舞　「は？」
愛結子「え？……あ、いや、あの、別に変な意味はなくって……もし、舞ちゃんが愛煙家だったら、きっと今、凄く辛いんだろうなって思って」
舞　「どういう意味ですか？」
愛結子「えっ？と……ほら、煙草、もう、殆ど残ってないし……煙草吸う人って、煙草がないと生きていけないっていうか、凄く苦しくなるというか」
舞　「高橋さんって、本当に３０代なんですか？」
愛結子「どういう意味？」
舞　「自分で考えてくださーい」
愛結子「……ごめんね……」

愛結子、退場する。間。トイレの水を流す音。
舞、軽く踊る。が、悲しくなって直ぐに止める。
愛結子、興奮気味に、自転車のハンドルを持って登場。

愛結子「舞ちゃん！見て見て見て！これ！」
舞　「な、何ですか？」
愛結子「自転車の、上の部分！」
舞　「……は？」
愛結子「上の部分！自転車の！（ベルを鳴らす）」
舞　「いや、倒置法で言われなくても別に見れば分かりますけど」
愛結子「凄いよね！」
舞　「は？」

愛結子「これだけあってどないせいっちゅーねーん！てね？あははは
は。あはははははは」
舞　「頭、大丈夫ですか？」

愛結子、立ち止まり、自転車の上の部分をテーブルの上に置く。

愛結子「……ごめんなさい……」

間。

舞　「……高橋さんって、どうしていつも、そんななんですか？」
愛結子「……そんな？」
舞　「はい。めっちゃ気持ち悪いです。本当に」
愛結子「……」
舞　「（小声で）どうして……こんな女に……」
愛結子「……舞ちゃん。あのね」
舞　「はい？」
愛結子「あ……私……実は……」

地震。

愛結子「きゃっ！？」
舞　「来た来た来た来たー！！」
愛結子「舞ちゃん、大丈夫？」
舞　「見れば分かりますよね？」
愛結子「そ、そうだね！あははは……」

地震、静まる。間。

愛結子「終わった……ふぅ（お腹を擦る）」
舞　「……大丈夫ですか？」
愛結子「え？あ、うん！大丈夫だよ」
舞　「お腹の赤ちゃん。大丈夫ですか？」

間。

愛結子「……気づいてたんだ……」
舞　「そりゃあ気づきますよ。何度も何度も、これ見よがしに、
　愛しそうにお腹擦っちゃって」
愛結子「ごめんなさい……」
舞　「は？……どうして謝るんですか？」
愛結子「だって、この子……」
舞　「……」

舞、真顔で立ち上がり、愛結子のもとへ。愛結子、後ずさる。

舞　「どうして逃げるんですか？」
愛結子「だって」
舞　「意味分かんないんですけど！」
愛結子「きゃあああああっ！！？」

愛結子、お腹を護って蹲る。間。

愛結子「……あれ？」
舞　「あれ？じゃねえし……私が、お腹の子供をブッ殺すとでも
　思ってたんですか？私、高橋さんの中で、どんだけヤバイ女
　扱いされちゃってるんですか？」
愛結子「だって」
舞　「何処の世界に、こんな危機的状況下で、好きな男の子供を
　殺そうとする女が居ると！？」

間。愛結子、顔が真っ青になる。

愛結子「……違うの」
舞　「もう良いです」
愛結子「ち、違うの舞ちゃん！あのね」
舞　「もう良いですって！……あああああ！！もう！！！」
愛結子「ひっ」
舞　「どうして高橋さんはいつもいつもいつもいつもいつもいつも
　いーーーーーっつもっ！！そんな、そんななんですか！？
　人の神経を逆撫でするプロフェッショナルなんですか！？
　キモイキモイキモイキモイ大っ嫌い！！……ああもうっ！！」

舞、自転車の上の部分を自転車に見立てて退場しようとする。

愛結子「何処に行くの！？」
舞　「高橋さんが居ない所です」
愛結子「外はもう、真っ暗だよ！？」
舞　「知ってます」
愛結子「危ないよ！？」
舞　「知ってます」
愛結子「あとそれ、自転車の上の部分だよ！？」
舞　「知ってます」
愛結子「自転車の上の部分だけじゃ駄目だよ！自転車の下の部分も！
　自転車の下の部分もなくっちゃ上手く走れないよ！？」
舞　「そういう所だよ！？」
愛結子「馬鹿ぁあああ！！」

愛結子、舞を泣きながら優しくビンタ。

舞　「あべし！？……は？はあああああああ？」
愛結子「辛いのは、舞ちゃんだけじゃないんだよ……！？」
舞　「お前、マジかよ……」
愛結子「私だって、本当はずっとずっとずーーーーっと辛かったよ！
　怖かったよ！舞ちゃんに目の敵にされて、舞ちゃんに憎まれ
　て疎まれて嫌われて、舞ちゃんにお腹の子……いつか、殺さ
　れちゃうんじゃないかって」
舞　「殺すわけ」
愛結子「いや、殺す。普通だったら殺す」
舞　「はあ？」
愛結子「だってこの子は、たとえ杉山さんの遺伝子が入っていたとし
　ても、半分は、舞ちゃんが大っ嫌いな私の遺伝子なんだよ？」
舞　「それが何だって」
愛結子「舞ちゃんと、杉山さんの子供じゃ、ないんだよ？」

間。

愛結子「私も頭可笑しいのかもしれないけれど……舞ちゃんだって…

…十分、頭可笑しいよ……一人だけ……まともな人のフリしてさ……こんな時にまで……可笑しいよ……」

舞　「……じゃあ、言わせて頂きますけど……愛結子さんは、何がしたいんですか？」

愛結子「……何が、したい？」

舞　「こんな風になる前からずっと疑問だったんです。この人、何がしたいのか全然分からないって。杉山さんの事が好きなのに何もしない。ダンススクールも何となく通ってて、全然ヤル気を感じない。本当に杉山さんの事が好きなの？って思ってたら、ちゃっかりヤル事はヤってたみたいだし」

愛結子「だからそれは」

舞　「だから何度も何度も挑発したのに、もごもごするばかりで何も言い返してこないし、全部受け身だし。こんな状況になっても心配するフリして大人のフリしてやっぱり全部受け身だし私のせいだし……もう、ヤダ。どうして杉山さんは、こんな女を選んだの？どうして杉山さんは、居なくなってしまったの？どうして……私は……杉山さん……何処……？」

舞、泣きながら、愛結子のお腹に縋りつく。曲。

愛結子「全ての事に、意味があるとするならば……私は……

私達は……どうして、生き残っちゃったんだろうね……世界はもう、とっくの昔に、終わってしまったというのに……

私達なんかを生かしたって、何にも始まらないのにね……

終わっていく事しかもう、出来やしないのにね……」

舞　「……何ですかそれ……気持ち悪……」

愛結子「そうだね。気持ち悪いね……あーあ……ねえ舞ちゃん。もっと気持ち悪い事、言って良い？」

舞　「駄目です」

愛結子「ありがとう……」

舞　「ええ……？」

愛結子「私ね。こうなる前は、杉山さんの事が好きだった。本当に大好きだった。でも今は、舞ちゃんの方が好き」

舞　「はあ？」

愛結子「いや、好き……ていうか、大切っていうか……まあ、一番大事なのは、舞ちゃんだなあって」

舞　「はあ……」
愛結子「で、それは舞ちゃんも、同じ気持ちなんじゃないのかなって」
舞　「はあ？私が……高橋さんの事？」
愛結子「うん。そう。そうであってほしいなって……」
舞　「（ドン引きして）……馬鹿なんですか……？」
愛結子「そうだよね。馬鹿だよね、私」
舞　「知りませんけど……」
愛結子「……馬鹿だけど……まだ、生きてるから。私も、舞ちゃんも、（お腹を擦る）この子も……」
舞　「……」
愛結子「これからも、生き続けるから、私達……だから、舞ちゃんも……一緒に、生き続けよう？ね……？」
舞　「……」

舞と愛結子、就寝準備。やがて、一緒に眠る。暗転。
明転。翌朝。舞、目覚める。愛結子、何処にも居ない。

舞　「……高橋さん？……高橋さん……高橋さん！？」

トイレの水を流す音。

舞　「なんだ……」

舞、胸を撫で下ろす。愛結子、登場。

愛結子「あ、おはよー。よく眠れた？」
舞　「高橋さんのいびきが五月蠅すぎて眠れませんでした」
愛結子「えー？」
舞　「いや、マジで」
愛結子「（ガチで凹む）」
舞　「う、嘘ですよ。てか、もうすっかり慣れました！」
愛結子「私……本当に……ゴメンね……」
舞　「変な所はデリケートなんですね……あの」
愛結子「何？」
舞　「私、一晩よく考えたんですけど……私、やっぱり、高橋さんの事、心の底から大っ嫌いです」

愛結子「うん」
舞　「正直、どうして一緒に過ごしているんだろうって考えない日はありません。多分、これからもずっと、私は、高橋さんの事、大っ嫌いです」
愛結子「うん」
舞　「……でも……これからも、宜しくお願い致します」
愛結子「……朝ご飯、食べよっか？」

曲。舞と愛結子、朝食の準備を始める。

愛結子「あ、そう言えば」
舞　「何ですか？」
愛結子「お腹の子、杉山さんの子じゃないから」
舞　「え？」
愛結子「元彼との子だから、この子」
舞　「えええええええええ！！？」
愛結子「言っちゃった！」
舞　「（愛結子の真似）言っちゃった！じゃ、ねえし！え？じゃあ、杉山さんは……？」
愛結子「あ、いや、杉山さんの事も大好きだったよ？でも、まだ元彼と別れたばかりだったし、流石にまだ早すぎかなーって」
舞　「え、な、何？意味が分からない……」
愛結子「まさか妊娠してたとは……」
舞　「最低！！」
愛結子「あはは。やっぱり可愛いなあ舞ちゃんは。さ、出来た出来た」
舞　「クソビッチ！ビチグソビッチ！クソキッッッッッモッ！！？」
愛結子「はいはい。座って座ってー」
舞　「本当に信じらんない……」
愛結子「文句は朝ご飯を食べ終わってから全部聞きます」
舞　「はい。全部言わせていただきます」
愛結子「はい。いただきます」
舞　「いただきます（おにぎりを頬張る）あ、美味しい……」

舞と愛結子、朝ご飯を食べ始める。
暗転。
終わり。